

Title	アメリカの公衆衛生大学院にて学ぶ
Author(s)	金子, 典代
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2001, 7(1), p. 45-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56882
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

アメリカの公衆衛生大学院にて学ぶ

金子典代

Learning public health in the graduate school of America

Kaneko,N

私は保健学科看護学専攻を1999年に卒業後、公衆衛生学を学びにアメリカに留学しました。現在アラバマ大学公衆衛生大学院の二回生、健康行動学講座に所属しています。今回は私の専攻において話題になっている“ヘルスプロモーションプログラムにおけるIT（情報技術）の活用”について少しお話をさせていただきたいと思います。

ヘルスプロモーション分野におけるIT（情報技術）の活用

IT活用に関しては、ここアメリカは何といっても先進国。医療分野ではもちろん、私の所属する健康行動学分野でも、コンピューター技術を疾病予防・健康促進を達成するために実際の地域や医療施設の場でどう活用するか、ということは今一番注目を浴びていることの一つです。この背景には人の健康に関する情報や、人間の行動変容をめぐる研究成果がアカデミックの分野では蓄積されていく一方で、その貴重な情報・知識が、実際の臨床でうまく生かされていないという現実があります。禁煙教育プログラムを例に取りますと、これまで数多くの研究により、その対象の持つ禁煙に対するモチベーションの程度、性別、年齢など、その対象の持つ特性に合わせたプログラムを作成し、提供する方が、従来型の対象全員に同じパンフレットを配布するというような単一型のプログラムより禁煙成功率・持続率は高いということは明らかになっています。しかし実際の現場では、費用や人員不足などの問題からそのような個人の特性を配慮した効果的なプログラムはなかなか提供できない現実があります。そこでその実行のバリアとなっている費用や人員不足の問題を解消させるのではないかと期待されているのがコンピューターの持つ利点である正確なデータ管理・処理機能というわけです。実際に行われている禁煙プログラムの例では、対象が自宅から、電話オペレーターを介して現在の喫煙に関する情報をコンピューターに入力します。そしてその得た情報とあらかじめ収集されているその対象の個人情報（喫煙歴、禁煙失敗歴、家族協力の程度など）をもとに、その対象だけの禁煙達成のためのオリジナルメッセージが作り出され、郵送にて随時送付されるというようなものがあります。

しかし本当にコンピューターがきちんと対象をアセスメントできているのか、実際にどれくらいの費用と労力で出来るものなのか、評価はどうするのかなど疑問はつ

きません。そこでこのような疑問に答えるべく、IT活用に焦点を絞った授業が、この夏に私の所属する健康行動学専攻にて開講され、私もその授業を受講しました。その中では、コンピューター利用にからむメリット、デメリット、プログラムの評価方法、これからの動向、課題についてのディスカッションと平行して、自分の関心のある問題分野にて実際に利用可能なプログラムを作るという課題がありました。その自分のプロジェクトにてコンピューターを活用する意義、目標、評価方法など一連の詳細なプランを作成した後、専用のコンピューターソフトを利用してプログラムを作成するというものでした。私はかねてからの研究テーマである青少年の性行動に焦点を当て、日本人青少年を対象にした性行為感染症予防のための性教育プログラムを作りました。その内容は脚本仕立てのもので、ある青少年のカップルを主人公とし、コンピューターの画面上に彼らの性の問題に関するドラマが繰り広げられ、“もしあなたがその主人公の立場ならどういう行動をとるか”と危険な場面ごとに質問する形で進行していく設定にしました。一つのシナリオを紹介しますと、家には誰も居らず、相手の部屋で二人きり、相手はどんどん先を要求してくる、でも相手はコンドームを持っていないし、使おうとする気もない…このような状況がドラマで示された後、“この時あなたならどうする？”という質問が出ます。その質問に対象がどう答えるかによって、そのカップルの関係に様々な結果（妊娠、性行為感染症にかかる、あるいは問題なしなど）が待っている、そして問題ある結果が出た場合はそれを防ぐための教育メッセージが与えられる…というような、凝った作りに仕上げました。自分の持てるだけの発想力を駆使して作った苦心の作でしたが、これがクラスメート、教授、学科長に至るまで、高い評価を受ける事が出来ました。しかし何よりもこのITの活用方法が医療保健の分野で急ピッチに模索されている時代に、ここアメリカにて最先端の知識にふれる事が出来たことはとても貴重な経験となりました。

終わりに

ここアメリカの地に初めて足を踏み入れた当初は、慣れない事だらけで、つい最近までうしろを振りかえる余裕もありませんでした。涙あり、感動ありの波乱万丈のこの1年でしたが、多くのことを学び体験する、充実した

日々を送っています。このように先が見えない不安だらけのまま始まった海外留学でしたが、ようやく折り返し点を過ぎ、現在は修士論文完成にむけて日々格闘中です。あと残り半年、無事卒業出来るよう、精一杯頑張ろうと思います。

最前列が筆者